全国歴史教育研究協議会第59回研究大会(兵庫大会)参加報告

逗子高校　**澤野　理**

全歴研兵庫大会は，2018年7月25日(水)～27日(金)の3日間にわたり，神戸市のラッセホール(最終日は史跡見学；神戸地区・姫路地区の2コース)で開催され，北は岩手県から南は沖縄県まで約280名の参加者を集めた。今回も残念ながらブラキストン線を越えることは叶わなかったが，大いに盛会であったといえよう。大会基本テーマは，「新科目歴史総合にどう向き合うか」というもので，4年後(当時)に迫った歴史系の新しい3科目への取り組みについて，意欲的な発表がなされた。大会の構成は，1日目に分科会，2日目は午前にシンポジウム，午後に記念講演という従来の型を踏襲していた。本稿では，筆者が主に参加した第2分科会「歴史総合に向けた実践」に絞って記すこととしたい。

第2分科会の最初は，兵庫県立姫路南高等学校の安達一紀先生の「ヒストリー・リテラシーを高める発問」で，ここでは現在の大勢である歴史教育改革の方向や実践について，「この方向で改革を進めて良いものなのか」という第一声から，従来の「暗記教育」へのカウンターとして「(歴史的)思考力」が持ち上げられている言説に対しする疑問が提示された。安達先生によれば，「暗記はだめではなく，どのような暗記にしなくてはいけないのか」という点が重要であるという。それなくしては，「過去がどのように語られ，「歴史」とまとめられて」いることを意識して歴史言説と関わることができない(ヒストリー・リテラシーが育成できない)と唱える。安達先生の問題提起は，「生徒が主体的に考えて発信した意見は，原則プラスの評価を与えるべきである」というような，無責任ともいえる生徒主体の授業改善方針への痛烈な批判である。ただし，それが従来の「暗記」ではダメなことは明かで，安達先生は， Chalk & Talk 主体の授業にリテラシーを高める発問を少し加えているということである。たとえば，「「アルファベット順」に編集することの新しさがどこにあったと思う」，「「○○が全国を統一した」のおかしい点はどこか」，「カノッサの屈辱は誰にとっての屈辱か」など，さらに「これらの答えがどのように問われるかは自分たちで考えなさい」にいたっては，「自分で問いを発する」という歴史総合を先取りした発問ではないのだろうか。

続く発表は，同志社高校の川島啓一先生の「『歴史総合』と『深い学び』―問いではじまり，資料を読み解く歴史教育―」で，授業のテーマごとに「発問」「資料」「批判的思考や比較的思考に導く発問」などを提示した実践報告がなされた。川島先生の実践報告は，ご自身の世界史(歴史)に関する深い知見に立ったものであるため，単純な “How to” で終わっていない点が(Chalk & Talk 主体の授業にこだわっている筆者にとっても)参考になる。今回の発表で初めて知ったのであるが，川島先生は毎回の授業の冒頭に10分の「テーマについてのまとめ」を講義するということであった。そして，授業が上手くいくかどうかは「まとめ」次第であるという。

つまり，ここでも生徒に考えさせるためには，教師が十分な歴史的事項についての知識・理解とそれをまとめる力が不可欠なのだということなのである。この点を勘違いした実践報告が，散見される現状を憂慮していた筆者にとって，見た目の実践方法の異なる2人の先生が根っこの部分で同じ認識を持っていたということは，私の今後の実践にとっても励みとなることであった。巻頭言でも記したが，歴史分科会の活動や全歴研などの研究会に参加して自身の知見を「広く」そして「深く」することが，「授業改善」の第一歩なのではないだろうか。校内だけの研究だけでは，気がつかない新たな発見も必ずある会合である。2019年は，近場の東京における開催ということもあるので，読者の皆さんも是非参加してはいかがだろうか。